

〔研究ノート〕

初年次英語教育の現状と課題：ポストコロナ期の新しい学びを考える

The Current Status and Issue on First-Year EFL Programs: Considering New Learning in the Post-Corona Period

中村学園大学 栄養科学部 フード・マネジメント学科

津田 晶子

中村学園大学 流通科学部

池田 祐子・スコット・マキネス

1. はじめに

本稿では、福岡県の私立大学において、コロナ禍のオンライン授業を経験した日本人英語教員と外国人英語教員の視点から、初年次英語教育の現状を分析し、今後、取り組むべき課題について検討する。津田・池田は、日本人英語教員の視点から「コロナ禍の国際交流と英語教育」「入学前英語教育調査」について、マキネスは外国人英語教員の視点から“Challenges in English Language Teaching”について論ずる。

2. 本学におけるコロナ禍の国際交流

英語教育において動機づけは非常に重要である。英語を学ぶ意義を考え、自身の短期的・長期的目標を設定することで学習意欲がわく。大学においては、留学や海外研修がそのきっかけともなる。しかし、新型コロナウイルス感染症のパンデミックにより、2020年春から2023年冬まで、海外に出ることは極めて困難であった。本学では、2020年度の留学および海外研修プログラムは全て中止となり、渡航制限解除を待たず、留学を断念する者もいた。2021年度は、出入国制限がある中で留学制度が再開したが、現地でもオンライン授業に切り替わるなど、制限下での留学となった。

このような時期に本学では学生部と各学部協

働で COIL (Collaborative Online International Learning) プロジェクトを実施した。COIL は ICT を用いて海外の大学とオンラインで学び合うことができる、新しい国際交流の形態である。既存の留学プログラムにおいても、事前学習に COIL を組み込むことで、渡航後の学びを深めることが可能である。外出制限のかかる中、自宅で国際交流ができる手段として COIL が果たした役割は大きく、参加者は真剣に英語に取り組んだ。

COIL 初年度の2020年は、栄養科学科、フード・マネジメント学科、食物栄養学科の6名の学生が、ハワイ大学カピオラニ・コミュニティ・カレッジの学生たちと、料理を通して協働学習を行った。彼らは郷土料理の調理光景を動画撮影し、Facebook で相手校と共有、オンライン上で意見を交わし、相手校の料理を試作した。参加者の中には N-HAL (Nakamura Habatake Active Learning) プログラムや、ダブルディグリー制度でカピオラニ・コミュニティ・カレッジに留学予定の学生も含まれ、今回オンラインで交流した学生たちが後に現地で交流を深めることも期待された。

プロジェクト2年目の2021年は、教育学部と幼児保育学科の学生7名が、フィンランドのトゥルク応用科学大学の学生と、教育システム、

福祉、文化、家族について調査を行った。慣れない英語に苦戦しながらも、幅広い年齢層のフィンランドの大学生と協働学習を行った結果、プロジェクトを継続させたいという声が両校の学生から多く聞かれた。また、プロジェクトに参加した教育学部の学生が後にトゥルク応用科学大学に留学し、学生たちと対面したことも報告されている。

プロジェクト最終年度の2022年は、流通科学部とキャリア開発学科の学生37名が、台湾の玄奘大学と観光やSDGsをテーマに協働学習を行った。玄奘大学の学生は日本語専攻であったため、日本語が主要言語として用いられたが、英語が得意な学生間のやり取りでは英語も使用された。プロジェクトに参加した玄奘大学の学生のうち、2名は本学の流通科学部に留学し、オンラインで協働学習をした学生たちと交流を深めた。

COILプロジェクトのうち、トゥルク応用科学大学と玄奘大学は翌年以降も継続しており、国内にしながら国際交流ができる貴重な機会となっている。現地での留学や海外研修と合わせて、学生の英語力向上への重要な動機づけとして今後も発展していくことが期待される。

3. 入学前英語教育調査

(1) 本学における先行調査

仁後(2020)¹⁾らは、本学の栄養系学生を対象に、高校の英語教育(大学入学前教育)質問紙調査を実施した。栄養系分野でのグローバル人材育成を目指した英語教育プログラム開発を目指して、栄養系学科の1年生を対象に高校の英語教育(大学入学前教育)アンケートを行い、高校時代に受けた英語教育の実態を把握し、学生達がどのような教材を求めているのかを検討することを目的としている。

2019年4月、前期の授業初回時に本学栄養科学科2年生217名(実用栄養英語B)、フード・マネジメント学科1年生122名(大学基礎演習)、

短期大学部食物栄養学科1年生87名(英語(基礎))、計426名を対象に実施し、352名(82.6%)から回答を得ている。なお、実用栄養英語Bについては、2年生を対象にした調査となっている。その結果は以下のとおりである。

①「電子辞書の使用の有無」は、「使用した」が69.3%(244名)であり、多くの高校生が電子辞書を使用していることがわかった。

②「ICT機器の利用の有無」は42.3%(149名)が使用しており、電子黒板が53.7%(80名)、コンピュータが26.8%(40名)、タブレットが19.5%(29名)であった。本学ではラップトップコンピュータ「N-Note」が必携になっていたが、2019年には過半数の学生が入学前の英語の授業でICT機器に触れていないことが分かった。

③「外国人教員の配置(ティームティーチングだったか、または、外国人教員のみの授業だったか)」は78.7%(277名)が外国人教員の授業を受けていたが、日本人教員とのティームティーチングが多く、外国人教員のみの授業を受けた者は5.8%(16名)であった。なお、私立高校では、外国人教員によるダイレクトメソッドによる授業を特徴としている高校も見られる。

④「英語について一番得意だと思うもの」は文法が18.2%(64名)で最も多く、リーディングが15.9%(56名)、リスニングが15.3%(54名)、ライティングが14.2%(50名)と続きスピーキングが10.0%(35名)と最も低かった。

⑤「英語について一番苦手だと思うもの」はリスニングが26.1%(92名)と最も高く、次にスピーキングが23.0%(81名)で続き、文法が17.6%(62名)であった。

(2) 令和5年度「入学前英語教育調査」

① 調査実施期間と回収率

前述の先行調査は、コロナ禍の前に実施していたこと、また、栄養系学部・学科に特化した

ものであったことから、本大学の3学部、4学科を対象に、新たに質問項目を吟味し、質問紙調査を実施した。本学のラーニングマネジメントシステム(LMS)、UNIPAのアンケート機能を活用し、令和5年4月10日から5月13日まで、無記名で実施し、栄養科学部、教育学部、流通科学部の1年生849名中820名から回答を得ており、回収率は96.6%である。

② 入学時点で所持している英語の資格

TOEICテストとは、世界最大の非営利テスト機関である米国のETSが開発している語学テストであり(IIBC, 2023)²⁾ 中村学園大学ではTOEIC Listening & Readingテストの受験を推奨し、実施団体が期間を任意に設定できるTOEIC IPテストを年に4回実施している。また、流通科学部と栄養科学部フード・マネジメント学科では高得点者に対して、スコアによる単位認定の制度がある(流通科学部700点、フード・マネジメント学科600点)。本学の英語圏の協定校派遣では、TOEICの高スコアが出願条件の一つとなっている。

「所持している英語の資格すべてについて、すべてを選んでください」の質問に対して、全体では、何らかの資格を所持している(いずれかの資格に回答)学生は59.5%、資格を所持していない(「なし」)学生は40.5%となっている。所持している資格をみると、全体では「実用英

検準二級」が33.3%と最も多く、次いで「実用英検三級」23.5%、「実用英検二級」13.8%となっている。TOEICにおいては全般的に少なく、それぞれのスコアが1%未満の所持率となっている(図1「入学時英語資格取得状況」を参照)。

学科別に「資格あり」(いずれかの資格に回答)の割合をみると、教育学部が68.9%と最も多くなっている。次いで、栄養科学部(66.7%)、フード・マネジメント学科(56.1%)、流通科学部(46.0%)と続く(表1「学科別・入学時英語資格取得状況」を参照)。

長期留学の出願時期が主に1年生～2年生であることや、就職活動のエントリーシートにTOEICスコアを記載しなければならない場合があること、多くの学科において本学の英語の授業が1,2年次で終わり、3年次以上には外国語の授業の開講がないことから、入学時にはTOEICを受験したことがある学生がごく少数であることを念頭に置いて、学生指導をしなければならないことが明らかになった。

③ 高校での電子辞書の使用状況

高校での電子辞書の使用率は全体で68.8%と約7割である。高校が公立か私立かで電子辞書の使用率が異なる。高校の設置者別でみると、公立は77.9%、私立は50.6%となっており、公立高校の使用率は、私立高校に比べ27ポイント

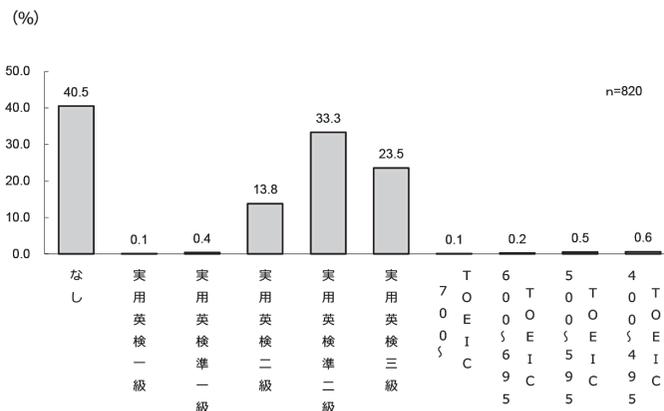


図1 入学時英語資格取得状況

表1 学科別・入学時英語資格取得状況

	n	なし	実用英検 一級	実用英検 準一級	実用英検 二級	実用英検 準二級	実用英検 三級
全体	820	332	1	3	113	273	193
	100.0	40.5	0.1	0.4	13.8	33.3	23.5
栄養科学科	213	71	0	2	45	73	58
	100.0	33.3	0.0	0.9	21.1	34.3	27.2
フード・マネジメント学科	114	50	0	0	11	34	35
	100.0	43.9	0.0	0.0	9.6	29.8	30.7
教育学部	244	76	1	1	45	103	53
	100.0	31.1	0.4	0.4	18.4	42.2	21.7
流通科学部	248	134	0	0	12	63	47
	100.0	54.0	0.0	0.0	4.8	25.4	19.0

	n	TOEIC700 ～	TOEIC600 ～695	TOEIC500 ～595	TOEIC400 ～495
全体	820	1	2	4	5
	100.0	0.1	0.2	0.5	0.6
栄養科学科	213	0	1	0	2
	100.0	0.0	0.5	0.0	0.9
フード・マネジメント学科	114	0	0	2	1
	100.0	0.0	0.0	1.8	0.9
教育学部	244	1	1	2	2
	100.0	0.4	0.4	0.8	0.8
流通科学部	248	0	0	0	0
	100.0	0.0	0.0	0.0	0.0

(上段:実数(人数)、下段:構成比(%))

高い。これは、私立高校ではタブレットを使用しているケースが多く(後述)、タブレットで電子辞書の代用をしていることが推測される。電子辞書を所持していない学生が3割はいることを念頭に置いて、授業での単語調べについて考慮しなければならない。(表2「学科別出身校別・電子辞書の利用率」を参照)

④ 高校の英語の授業で使っていた ICT 機器

英語の授業で使っている情報機器関連をみると、「電子黒板」が58.4%、「Power Pointなどのスライド」が42.4%、「タブレット(iPadなど)」が35.9%となっている。

高校の設置者別では、公立は「電子黒板」の使用が69.6%と、私立の35.8%に比べ30ポイント以上多い。一方で、私立では「タブレット(iPadなど)」の使用が61.5%と特に高く、公立の22.8%に比べ約40ポイントも多くなっている。

県別では、該当数の多い「福岡県」と「佐賀

県」を比較すると、佐賀県では「電子黒板」が90.2%と、福岡県の56.0%に比べ34ポイントも高くなっている。また、他の情報機器においても、10ポイント前後と高い利用率となっている。

このことから、高校の出身県や公立・私立かで、英語で使用されていた ICT 機器の種類がかなり異なることが分かる。たとえば、長崎県では36.8%の高校でコンピュータが使用されていたが、沖縄県ではコンピュータが導入されていた高校から進学してきた学生はいない。本学ではラップトップコンピュータを1年生の時から全員必携となっているが、学生ごとに IT スキルにかなりばらつきがあることを考慮しつつ、授業を進めなければならない(表3「学科・出身高校の設置者別・県別—ICT 機器・情報機器」を参照)。

⑤ 外国人の授業の有無

「高校では、外国人による英語授業はありましたか」という質問に対し、全体では「あった」

表2 学科別出身校別・電子辞書の使用率

(単位：%)

	n	使用率
全体	820	68.8
栄養科学科	213	71.4
フード・マネジメント学科	114	70.2
教育学部	244	73.4
流通科学部	248	61.7
公立（国立、都道府県立、市立）	543	77.9
私立	265	50.6

※「使用していた」を使用率とする。

表3 学科・出身高校の設置者別・県別—ICT 機器・情報機器

	n	電子黒板	PowerPointな どのスライド	タブレット (I Padなど)	YouTubeなど の動画	コンピュータ	電子教科書
全体	820	479	348	294	119	109	65
	100.0	58.4	42.4	35.9	14.5	13.3	7.9
栄養科学科	213	121	98	74	26	21	27
	100.0	56.8	46.0	34.7	12.2	9.9	12.7
フード・マネジメント学科	114	64	54	36	16	18	6
	100.0	56.1	47.4	31.6	14.0	15.8	5.3
教育学部	244	151	96	98	44	38	18
	100.0	61.9	39.3	40.2	18.0	15.6	7.4
流通科学部	248	142	100	86	33	32	14
	100.0	57.3	40.3	34.7	13.3	12.9	5.6
公立（国立、都道府県立、市立）	543	378	262	124	82	75	48
	100.0	69.6	48.3	22.8	15.1	13.8	8.8
私立	265	95	81	163	34	33	17
	100.0	35.8	30.6	61.5	12.8	12.5	6.4
福岡県	629	352	259	217	91	70	38
	100.0	56.0	41.2	34.5	14.5	11.1	6.0
佐賀県	61	55	32	27	14	17	17
	100.0	90.2	52.5	44.3	23.0	27.9	27.9
長崎県	19	15	3	8	2	7	0
	100.0	78.9	15.8	42.1	10.5	36.8	0.0
熊本県	27	15	11	10	2	6	3
	100.0	55.6	40.7	37.0	7.4	22.2	11.1
大分県	22	11	13	18	1	3	1
	100.0	50.0	59.1	81.8	4.5	13.6	4.5
宮崎県	18	8	9	5	2	2	1
	100.0	44.4	50.0	27.8	11.1	11.1	5.6
鹿児島県	18	6	8	4	3	2	0
	100.0	33.3	44.4	22.2	16.7	11.1	0.0
沖縄県	6	6	4	0	2	0	3
	100.0	100.0	66.7	0.0	33.3	0.0	50.0
山口県	7	5	4	2	1	1	0
	100.0	71.4	57.1	28.6	14.3	14.3	0.0
その他	12	5	5	2	1	1	2
	100.0	41.7	41.7	16.7	8.3	8.3	16.7

(上段：実数（人数）、下段：構成比（%）)

が77.9%と約8割である。公立では86.2%が「あった」と回答し、私立の61.5%よりも高い。学部ごとの比較では、フード・マネジメント学科が82.5%と最も高いが、各学科で2割～3割の学生は、高校で外国人の授業を全く受けていない（表4「学科別・出身県別高校での外国人の授業」を参照）。

外国人による英語授業の形態を見ると、「日本人の英語教員とのペアの授業」が85.0%であり、「外国人のみによる英語の授業」は15.0%にとどまる。教員免許がなければティームティーチングでの授業となることから、多くの場合日本人教員と共に授業が行われ、授業の一部では日本語も使われていると推察される。高校の設置者別では、公立では「日本人の英語教員とのペアの授業」が94.0%と大部分であるが、私立では「日本人の英語教員とのペアの授業」が58.9%、「外国人のみによる英語の授業」が41.1%と、およそ6:4の比である。私立高校出身者の実状として、外国人のみで英語授業を行うほど英語教育に力を入れている高校と、外国人の授業は一切行わない高校では、大学入学

表4 学科別・出身県別高校での外国人の授業

	n	あった
全体	820	77.9
栄養科学科	213	79.8
フード・マネジメント学科	114	82.5
教育学部	244	82.4
流通科学部	248	69.8
公立（国立、都道府県立、市立）	543	86.2
私立	265	61.5
福岡県	629	76.0
佐賀県	61	85.2
長崎県	19	89.5
熊本県	27	77.8
大分県	22	90.9
宮崎県	18	100.0
鹿児島県	18	83.3
沖縄県	6	83.3
山口県	7	100.0
その他	12	50.0

後の外国人の授業において、指示に対する理解度や授業への適応力に差が出ることが推察される（表5「学科・出身校別の授業形態」を参照）。

実際、本学で開講している「英語コミュニケーション」の多くは外国人が担当しているが、指示文の聞き取りや課題内容の理解に苦慮する学生もいる。高校での英語の授業形態に違いがあることに教員は目を向ける必要がある。中には、授業中の会話は可能な限り英語で行うが、課題には日本語訳をつけるなどして、学生を置き去りにすることのないよう配慮している外国人教員もいる。

表5 学科・出身校別の授業形態

(単位:%)

	n	外国人のみによる英語の授業	日本人の英語教員とのペアの授業
全体	639	15.0	85.0
栄養科学科	170	15.9	84.1
フード・マネジメント学科	94	13.8	86.2
教育学部	201	15.9	84.1
流通科学部	173	13.3	86.7
公立（国立、都道府県立、市立）	468	6.0	94.0
私立	163	41.1	58.9

⑥ 英語5分野に関する意識

英語5分野【リスニング（聴く）／リーディング（読む）／スピーキング（話す）／ライティング（書く）／英文法】に関する意識を調査したところ、全般的に「得意／やや得意」と回答した学生は10%前後にとどまり、「苦手／やや苦手」と感じている学生は50%～70%台であった。今回の調査では、最も苦手な分野は「スピーキング」（76.6%）で、「英文法」（64.9%）、「ライティング」（57.1%）、「リスニング」（55.7%）、「リーディング」（51.8%）の順に続いた（図2「英語5分野に関する意識」を参照）。

スピーキングに次いで文法に苦手意識があるという事実は、英語教員間で共有される必要がある。大学の授業では、往々にして、学生が高校までに習う英文法を知っていることを前提に

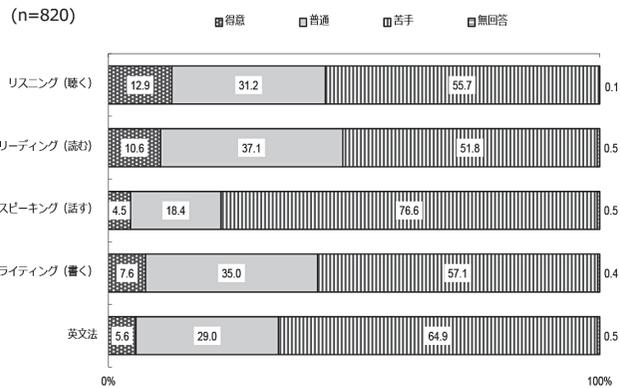


図2 英語5分野に関する意識

進めているが、文法については学生の理解度を確認するのが望ましい。

仁後(2019)らの調査では、栄養系学生(栄養科学科2年生・フード・マネジメント学科1年生・短期大学部食物栄養学科1年生)の最も得意な項目は文法であった。しかし今回の調査では、栄養系学生(栄養科学部1年生・フード・マネジメント学科1年生)の最も得意な項目はリスニングであり、変化が見られる。

英語が得意と回答した学生が最も多いのは栄養科学科で、リスニング、リーディング、ライティングの3項目で他学科よりも「得意・やや得意」と答えた割合が高い。その栄養科学科でも、スピーキングに対する苦手意識は、フード・マネジメント学科に次いで高い。フード・マネ

ジメント学科の特徴として、他学科と比べて、学科内に「文法が得意」と考えている学生たちがいると考えられる。フード・マネジメント学科独自のダブルディグリー制度が、一部の学生が文法に秀でた状況を生み出している可能性があり、学科内で、学生間の文法力に差があると考えられる。流通科学部は、スピーキングを得意と答えた割合が他学科よりも高い一方で、他の分野について得意と答えた割合は他学科よりも低い。同学部では、高校時代にスピーキング中心の授業を受けてきた学生が多い可能性がある(表6「学科・出身高校の設置者別—英語5分野に関する意識」を参照)。

⑦ 卒業後の英語ニーズに関する意識

「あなたは卒業後の進路において、どのくら

表6 学科・出身高校の設置者別—英語5分野に関する意識

(単位: %)

	n	リスニング (聴く)		リーディング (読む)		スピーキング (話す)		ライティング (書く)		英文法	
		得意	苦手	得意	苦手	得意	苦手	得意	苦手	得意	苦手
全体	820	12.9	55.7	10.6	51.8	4.5	76.6	7.6	57.1	5.6	64.9
栄養科学科	213	15.5	55.9	14.1	44.1	4.7	77.9	11.7	51.2	7.5	54.9
フード・マネジメント学科	114	14.0	57.9	7.9	52.6	3.5	78.1	6.1	60.5	7.9	69.3
教育学部	244	12.3	50.8	11.9	54.5	4.5	73.8	6.6	53.3	4.9	61.9
流通科学部	248	10.9	59.3	7.7	55.2	4.8	77.4	5.6	64.1	3.6	74.2
公立 (国立、都道府県立、市立)	543	14.2	53.6	11.0	52.5	5.2	79.0	9.0	57.1	5.2	64.5
私立	265	10.9	60.0	9.1	51.3	3.4	72.1	4.9	57.4	6.4	65.3

※得意=「得意」+「やや得意」の回答率

苦手=「やや苦手」+「苦手」の回答率

※「普通」及び「無回答」は非表示

い英語が必要になると考えますか」という質問に対し、「非常に必要」「必要」「やや必要」「必要ではない」の4つの選択肢から選ばせたところ、全体では「非常に必要」が21.8%、「必要」が46.1%。合計67.9%と、7割弱の学生が卒業後の進路において英語能力が必要だとしている。なお、「やや必要」は28.7%、「必要ではない」は3.2%であった。

多くの学生は、卒業後の進路において英語能力は必要と考えている。学科別に英語能力の必要度をみると、流通科学部が71.0%と最も高く、次いで教育学部が70.1%、フード・マネジメント学科が66.7%、栄養科学科が62.4%となっている。

流通科学部では、入学前の英語資格の取得率は半数以下と、4学科のうち最も低いが、ビジネスパーソンを目指していることから、卒業後の英語ニーズについては理解している学生が多い。一方で、6割以上の学生が英語の資格をもって入学する栄養科学部では、卒業後の英語ニーズについて「非常に必要」と考える学生が17.8%にとどまる。理由として、「卒業時に国家試験を受験する私立理系学科としてカリキュラムが過密化しており、卒業後の英語のニーズが顕在化していない」ことが考えられる。（「科研費調査プロジェクト栄養士・管理栄養士養成校における英語教育の実態調査」）³⁾ 教育学部においては、小学校での英語が教科化したことや、教員採用試験で英語面接が実施されている自治

体があることから、卒業後の英語のニーズについて入学時から自覚している者が多いと考えられる（表7「学科別卒業後の進路における英語力の必要性」を参照）。

⑧ 海外での語学研修・留学検討状況

「あなたは在学中に、海外での語学研修や留学を検討していますか」という質問に対し、「検討している」と回答した学生は13.3%である。「検討している」割合は、流通科学部が19.8%と最も高く、次いでフード・マネジメント学科と教育学部で12.3%、栄養科学科で7.5%である。なお、図3は留学の検討状況と卒業後の英語力の必要性の相関関係を見るため、語学研修や留学を「検討している」学生の割合を縦軸に、どの程度英語能力が必要だと考えているかを横軸にしたものである。英語能力が「非常に必要」と考える学生では、海外での語学研修や留学を「検討している」割合が33.0%を占める。「必要」と回答した学生では、「検討している」割合は10.8%に落ち、「やや必要」「必要ではない」では3%台と低い（図3「卒業後の進路の英語力の必要性と留学の検討状況の相関関係」を参照）。

語学研修や留学を「検討する未定」と回答した学生は41.8%で、この4割強の学生が将来的に語学研修・留学を希望する方に転じる可能性もある。学内の留学・海外研修説明会や、海外留学者の体験報告会を積極的に情報発信することで、学生たちの潜在的なニーズを引き出す

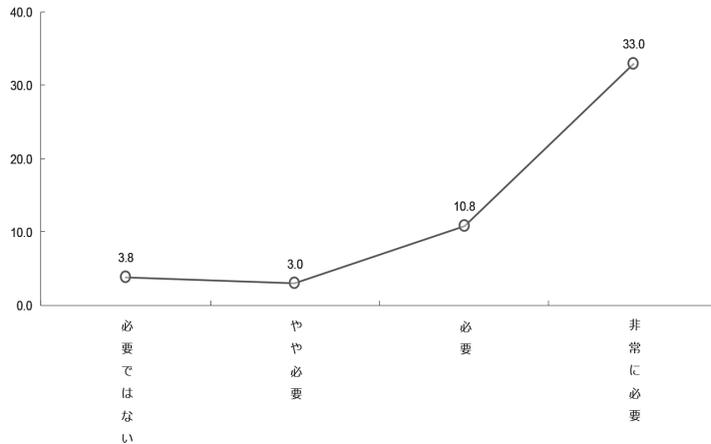
表7 学科別卒業後の進路における英語力の必要性

(単位：%)

	n	非常に必要	必要	必要度
全体	820	21.8	46.1	67.9
栄養科学科	213	17.8	44.6	62.4
フード・マネジメント学科	114	22.8	43.9	66.7
教育学部	244	22.1	48.0	70.1
流通科学部	248	24.6	46.4	71.0

※必要度=「非常に必要」+「必要」の回答率

図3 卒業後の進路の英語力の必要性和留学の検討状況の相関関係 (%)



のが望ましい（表8「学科別海外留学・語学研修の検討状況」を参照）。

令和5年度の協定校留学制度「N-HALプログラム」説明会には、2日間で33名、夏季3週間の海外研修説明会には48名、海外留学者体験報告会には63名の参加者がいた。なお、N-HALプログラムは本学の大学生を対象としているのに対し、短期の海外研修では大学だけではなく、短期大学部からの参加もできる。このような各種説明会については、オンラインでの参加も可能であれば、参加者はさらに増える可能性がある。

3. 提言

今回の新入生調査結果を元に、本学の英語教育プログラムを改善するために取り組むべき方策について検討する。

① 本学の特色に合致した英語プログラムの構築

令和5年度において、中村学園大学は、栄養科学部に日本人1名、教育学部に日本人1名、流通科学部に日本人1名、外国人1名と、学部ごとに専任の英語教員が配置されており、所属する学部の1年生から4年生のゼミ生までの指導をしているのが特色であり、強みである。

日本の多くの大学では、言語文化部や外国語

表8 学科別海外留学・語学研修の検討状況

	n	検討している	検討していない	未定	無回答
全体	820	109	367	343	1
	100.0	13.3	44.8	41.8	0.1
栄養科学科	213	16	110	86	1
	100.0	7.5	51.6	40.4	0.5
フード・マネジメント学科	114	14	43	57	0
	100.0	12.3	37.7	50.0	0.0
教育学部	244	30	113	101	0
	100.0	12.3	46.3	41.4	0.0
流通科学部	248	49	100	99	0
	100.0	19.8	40.3	39.9	0.0

(上段：実数（人数）、下段：構成比（%）)

教育センターに外国語教員を配置し、多様な学部、学科の学生（主に低学年）を指導しているのに対し、本学の専任の英語教員は、学部付の教員として、専門科目の教員とのコミュニケーションが取りやすい環境にあり、学生がどのような専門科目を学び、卒業後、どのような英語ニーズがあるか、把握しやすい立場にある。このことから、英語教員が卒業後の英語ニーズを考慮しながら、学部・学科に応じた英語カリキュラムやシラバスをデザインすることで、学生のモチベーションを上げることが可能であると考える。

② 英語学習に対する内発的および外発的動機付け

英語学習は長期的継続を要することから、外発的動機付けよりも内発的動機付けが重要である。内発的動機とは、英語学習そのものに興味・関心を持ち、英語を使って英語話者とコミュニケーションを行いたいという欲求であり、外発的動機づけとは外からの圧力によって動機づけられることで、報酬や試験、資格の為に学習することを目標とする（加藤，2008 p. 58）⁴⁾ 学生が「英語を勉強して、国際交流がしたい」という内発的動機を示したときに、それに応えられる場を複数用意しておくことが望ましい。

本学では、学部付の英語教員が全学的な語学教育の質を高めるため、外国語セクションとして連携を強化している。かつて、学部ごとに実施していた海外研修は、大学合同科目として統合し、指導の充実を図るため、日本人教員と外国人教員によるティームティーチングを行っている。海外研修の派遣先である協定校の職員や、旅行代理店との連絡は、本学の学生部と専属の留学コーディネーターが担当し、学生サポートも充実している。教職協働で推進するCOILプロジェクトは、令和5年度で4年目となり、様々な事情で海外研修への参加が難しい学生も、国内で国際交流ができる機会となっている。他にも様々な国際交流の機会が提供されているが、

これらの機会を知らない学生も多くいると考えられる。直接、授業で関わる教員が積極的にプログラムを紹介し、学生の内発的動機付けを高めるのが望ましい。

一方、本学の外発的動機としては、TOEIC IPテストと英語科目の連動、TOEIC 高得点取得者への報奨制度、単位認定、就職活動における優位性が挙げられる。外発的動機も確実に学生の英語力向上に寄与しており、TOEIC 高得点獲得者の数は徐々に増加傾向にある。学生の向上心に合わせて、こちらも引き続き制度を改良していく必要がある。

③ 英語教員へのサポートシステムの構築

学生の過半数が英語に苦手意識を持ち、熟達度、学習経験も多様化している本学においては、各英語教員が効果的な指導方法を授業で導入する必要がある。

Richards (2001. p. 212)⁵⁾ は、効果的な指導を提供するための教師への支援として、以下の11項目を挙げている。

- ・オリエンテーション
- ・教材
- ・コースガイド
- ・責任の分担
- ・研修
- ・授業からの解放
- ・メンタリング
- ・フィードバック
- ・報酬（パフォーマンスが優れている教員を会議や研修へ派遣したり、教員の公報で発表したりする、など）
- ・ヘルプライン
- ・レビュー

本学の英語の授業に関しては、非常勤講師が担当する授業が多いため、彼ら・彼女らが指導しやすい環境を提供することが肝要である。したがって、本研究は、本学の英語教育の実状を各学部の非常勤講師と共有し、より学生の実態に合った授業を展開するために、令和5年度末

のセミナーを計画している。そこでは全学的に推奨している TOEIC の教員向け講座として「TOEIC の教授法」を、また海外への興味を広げるための授業として、中村学園の特色である「食」を切り口に「海外の食文化」について講義を行う予定である。

謝辞 本研究は「令和5年度中村学園大学教育改革支援制度」の助成を受けたものである。

参考文献

- 1) 仁後亮介, 津田晶子, 大内田汐理, 藤原安奈, 中藤哲也, 松隈美紀, 三堂徳孝「栄養系学生の英語学習歴と CLIL 教材開発: 調理教員と英語教員の協業の視点から」中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要(第52号) 205-210 2020年
- 2) IIBC ETS について 2023年 https://www.iibc-global.org/toeic/toeic_program/philosophy_02.html 2023年11月22日アクセス
- 3) 津田晶子「科研費調査プロジェクト栄養士・管理栄養士養成校における英語教育の実態調査」2012年 <https://researchmap.jp/akikotsuda/others/36943483> 2023年7月10日アクセス
- 4) 加藤澄恵「英語学習者と動機づけ: 内発的動機と外発的動機からの考察」国際経営・文化研究(巻13号) 1, 57-65 2008年
- 5) Jack C. Richards, *Curriculum Development in Language Teaching*. New York: Cambridge University Press.2001.

4. Challenges in English Language Teaching

The era of the coronavirus in the world has created a new challenge for educators: online-only learning conditions and masking in the classroom.

Masking and Social Distancing in the Classroom

Japanese have always worn masks on occasion in social situations from an early

age, so it was easy for Japanese students to universally accept masks in the classroom. Having just a couple of masked students before the pandemic posed few problems to the language teacher, but due to the Coronavirus, having an entire class masked created a whole new set of challenges for the educator.

Both teaching and learning a foreign language can be difficult, especially in regards to low-level students. It could be argued that wearing a mask can severely hinder the efficacy and speed of learning a language. An example of this is how the mask can limit the ability to effectively conduct repetition training, so vital in language learning.

A core part of my lesson plans includes basic pronunciation and enunciation practice. Awareness of mouth movements is crucial in both teaching and learning a foreign language. To speak well, it's important to move, tense or relax the muscles in your face at the right time. A mask can physically limit these muscle movements if too tight, or cause distractions if too loose, such as having to continually adjust it.

Another problem with masking is comprehension, both with teachers and students. Voices tend to become somewhat muffled when a mask is used, making understanding more difficult. Also, the volume of the voice is naturally lowered when wearing a mask-thicker masks considerably distort the voice even more.

Teachers have the option of using a microphone to amplify their voice, however normally quiet students can be difficult for the teacher to understand. This is especially true with low-level students, who are typically shy and hesitant to speak. These students tended to speak even quieter than usual even before the COVID era. During the pandemic, I often found myself telling the students to speak louder, repeating their answers. This in turn adversely affected their confidence in their English ability, which on occasion caused them to speak even more hesitantly in future lessons.

Social distancing obviously has a negative effect in the language classroom. In lecture-type classes, it isn't necessary for students to sit in close proximity. However, in the language classroom pair work and close interaction with other students is a key ingredient for effective learning. The teacher is only able to give limited personal attention in a classroom with many students, therefore feedback from the peers of a student greatly helps.

In addition, during the height of the pandemic, the teacher was hindered from moving around the classroom freely and closely interacting with students. Instead of being receptive to feedback from the teacher, it could have been considered by some to actually been dangerous to approach a student too closely. During the entire lesson, both teacher and student are keenly aware to maintain their distance, further limiting communication potential.

Online Learning Challenges and Benefits

Surprisingly, I found online-only learning to be a lot more of an effective tool than I expected. Compared with strict in-class regulations during the height of the pandemic, the use of Zoom worked quite well. Of course, the ideal setting is in the classroom face-to-face normally, but the benefits of Zoom are obvious. Through recent improvements in technology the Zoom application has been increasingly easier to use for both students and educators.

The biggest challenge in online language learning is keeping students' attention focused in class and on the lesson. Many teachers allowed students to turn off their cameras during the class. Therefore, the teachers were unaware of whether the students were even paying attention at all. The alternative, having all students keep their video cameras on at all times, really wasn't feasible as some students had battery issues with older phones (or unable to be connected to the Internet via house PC).

One alternative I found to be very effective was having the student briefly turn on their cameras for a specific reason. I randomly chose 4-5 quick camera checks during the lesson to ensure students were present and paying attention. Once at the beginning when taking attendance, about 2-3 random times for a repetition exercise, and one final camera check at the end of the class. Even though all students had

their microphones muted (a necessity on the computer), I told the students to try and speak aloud at home as it was good English practice. All student cameras were required to be on during speaking exercises. I also made sure students had their cameras on showing their mouths for speaking confirmation (or at least making an effort). This proved very effective in creating a successful class.

A major benefit of online Zoom lessons was that the students could remove their masks and speak freely. If the student was studying on Zoom at school during the pandemic, I would have them social distance from each other, and move to an isolated, open classroom. This effectively allowed them to briefly lower their masks for speaking exercises. This was very beneficial in getting the students more

involved in the online lessons.

In conclusion, the increased use of masks in Japan since the pandemic began have increased language teaching challenges. Online learning will continue to grow in use at all levels in education. Since the lingering Coronavirus is expected to be prevalent for years to come, the obstacles it presents to learning will continue to exist.

Sources

Mu'awanah, N. "Using Zoom to Support English Learning During COVID-19 Pandemic: Strengths and Challenges", *Journal Ilmiah Dasa*, Vol 5, No. 2, April 2021. ISSN: 2549-6174.

PeZenik, S. "How a Year of Wearing Masks and Talking on Zoom Has Changed Us" , *ABCNEWS.go.com*, March 17, 2021.

